

資 料

地域包括ケアにおける看護の役割と 看護教育を国際的視野から考える —旭川大学・武漢大学健康学院国際交流研修会を終えて—

The roles of nursing in regional inclusive care and nursing education at
Asahikawa University and Wuhan University School of Health Sciences :
Seeing the topic from a global viewpoint

中川初恵¹⁾ 野村幸輝²⁾

Hatsue NAKAGAWA, Koki NOMURA

¹⁾ 旭川大学保健福祉学部保健看護学科

²⁾ 旭川大学経済学部

はじめに

2018年6月25～27日に中国の武漢大学健康学院（以降、武漢大学と略す）の看護教員5名を迎え、中国武漢市と旭川市の保健医療福祉の現状及び両学の取り組みを理解し、国際的視野から課題解決に向けた今後の示唆を得る目的で、国際交流研修会が開催された。本研修会の開催経緯、成果、今後の展望について報告する。

1. 国際交流研修会開催までの経緯

2016年2月、倉敷と上海の教職員と大学間研修会を開催した¹⁾。この研修会に参加していた上海の留学研究生を通じて本学が武漢大学に紹介され、先方より「大学間国際交流と高齢社会における看護や一人暮らしの高齢者の支援について学びたい」との希望があり、今回の研修会開催に至った。武漢大学は中国湖北省武漢市にあり、学生50,000人を有する国家重点大学の一つである。

1) 研修テーマの設定

中国は今後急速な高齢化が見込まれている。武漢市の高齢化率は18%（武漢大学教員来学時談）、旭川市の高齢化率は32.6%（2018年5月現在）であり、旭川市が現在の武漢市と同じ高齢化率18%を超えたのは2002年であった。中国では2020年に介護保険の導入を予定しており、2016年からパイロッ

ト地域で運用されている²⁾。こうした背景から、武漢大学は『2000年に介護保険はじめ在宅支援をしてきた日本は果たしてうまくいっているのか？』『介護保険導入20年後の課題は？』『これから目指すのはアメリカ型の社会保障か、それとも北欧型の社会保障か』といったことに関心が高いのではないかと思われた。

日本が介護保険導入20年を経て見えてきたことは、介護サービスが提供されれば高齢者を支えられるということではなかった。介護を受けるどころか孤立死が話題となり、2018年には北海道でも孤立死の人数や発見されるまでの期間が明らかとなった³⁾。世界的にも珍しく男性が長寿の地域の生活背景の特徴は「社会への溶け込み」や「親しい関係」で、禁煙、禁酒、運動より上位だった⁴⁾。これらの報告は、高齢者が長寿で健やかに過ごすには、生活支援では不十分で、人とつながり生きがいを支援する必要があることを示している。

そこで、本研修会のテーマは「小さくなる病院医療、大きくなる生きがい支援～看護教育は病院中心で良いのか？～」とした（図）。入院は期間の短縮と特化型医療となり、慢性疾患や障害とともにある高齢者は、自身の住む地域で自分らしく生きることが中心にある。図は今回の研修に参加いただいた各機関の役割と連携を示したものである。今後、介護保険を導入し、また国家重点大学として政策にも影

響力を持つ武漢大学と、介護保険導入20年目で、地方都市の高齢化対策に取り組む本学との国際交流研修にふさわしいテーマと考えた。

2) 研修会の開催準備

武漢大学には大学や看護教育の紹介を、旭川大学からは、看護と福祉の両輪の必要性を説き、学部開設を行った学長にその経緯を紹介いただくようにした。また武漢大学は学内におけるシミュレーション教育が特徴だったことから、本学からは地域に出て高齢者と関わりながら学ぶ本学の看護教育の特徴を学生による発表も含めて紹介することにした。

旭川市内の取り組みは、日本の高齢者の現状を紹介しつつ、生きがい支援を政策から一人暮らしの高齢者の具体的支援例まで紹介するため、図の4機関に講話いただくこととした。

小さくなる病院医療、大きくなる生きがい支援
～看護教育は病院中心で良いのか？～

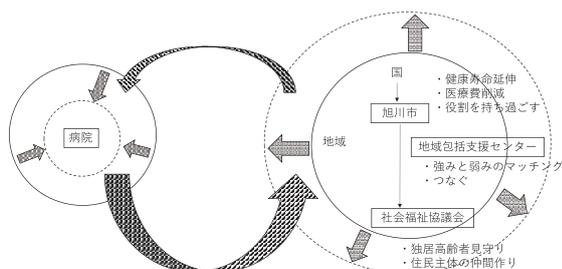


図 研修会のテーマ

2. 研修会の実際

1) 中国武漢大学における看護研究及び教育について (武漢大学健康学院 陈晓莉副院長)

看護学教育の導入は、アメリカの看護教員の支援を受け、それが現在もベースとなっている。修士課程の授業は全て英語で行われ、外部資金による研究に積極的に取り組み、バーチャルシミュレーション (Virtual simulation) 教育、学生の海外留学の支援を行っている。本学への訪問目的は、双方の大学理



解、学生交換留学、国際共同研究を行い、高齢者、慢性期疾患、緩和ケア、健康増進ケアを通じて看護の発展に寄与したい、とのことだった。

2) 現代日本の地域課題の普遍性と旭川大学の使命ー 武漢大学健康学院の来学に交響してー (旭川大学 山内亮史学長)

少子高齢化が進む道北の地域再生の当事者として市民があり、そのアシストが本学の役割であることを、現代社会の生きにくさや真の豊かさとは何かと問いかけながら話された。

武漢大学から「自殺が多いのはなぜ？」と質問があり、人間だけが持つ白目の意味に触れながら、人間が共感や同情のやり取りが必要な生き物であり、経済とコミュニティのバランスが崩れていることが要因と説明された。



3) 高齢者と地域交流活動及び他学科との協働から学んだこと (旭川大学地域ふれあい研究会 旭川大学保健福祉学部保健看護学科学生 佐々木慧子, 千葉佑真, 牧野遥香)

冒頭で中国語による自己紹介に挑戦し、地域高齢者への健康教室の様子や関わり、昨年からコミュニティ福祉学科や系列の短大で栄養や介護を学ぶ学生とも協働した中での他職種連携の必要性に関する気づき等を発表した。

武漢大学から「地域での活動はどの位の頻度で行っているのか」「嚥下体操とは具体的にどのように高齢者に実施しているのか」と質問があり、実演も



交えて紹介した。

4) 授業・課外活動を通して高齢者を知るーアクティブ・ラーニングの看護学教育上の意義ー (旭川大学保健福祉学部保健看護学科 中川初恵)

課外活動では前項地域ふれあい研究会の活動支援や小規模高齢者集落でイベントを通じた活動を通して、看護に必要な要素を学生が自らの言葉で語るようになることを紹介した。

武漢大学からは「地域でのイベントに対する経済的な支援はどうしているのか?」「なぜこの小規模高齢者集落で行っているのか?」といった質問があり、学生が現地に行くための交通費はこれを題材にする研究費から支出し、イベント自体は地域内外参加者から1,000円程度の参加費で賄い、あとは住民、大学教職員、学生で構成された実行委員会スタッフの力で運営していること、この地域で行うのは、ここがこれから増える小規模高齢者集落の最先端地域の一つであるためと返答した。



5) 日本の高齢者行政指針を受けての旭川市の高齢者支援行政の現状(特徴)と課題ー地域包括ケアと介護保険計画についてー (旭川市福祉保険部介護高齢課 菅原 稔課長)

旭川市の1人当たりの介護保険費用は全道平均や全国平均と比べて高額になっており、この理由として認定者の割合が多いこと、介護サービス提供体制が整っていることが要因であることが紹介された。高齢者の介護保険料増額の負担から地域包括ケアシ



ステムでの住まい、医療、居宅サービス、介護予防、生活支援体制といった整備が必要なお話しいただく予定だった。これは武漢大学より介護保険導入20年後の課題に関心が寄せられると予想していたからだったが、実際には介護保険制度自体に関する質問が多く、演者には先方の関心に臨機応変に対応しながら講話いただいた。特に介護保険の費用負担、高齢者の保険料負担や年金との連動による保険料回収システムに関心があり、これは中国で介護保険とともに年金や皆保険も2020年の整備を目指していること関連があったと思われる。

6) 旭川市の行政指針と地域住民および地域にある強みと弱みをつなぐとは?ー生きがい支援の立場から看護を目指す人達に思うことー (旭川市永山地域包括支援センター 福島将恭センター長、高橋通江副センター長)

地域包括支援センターは、地域住民にとって保健医療福祉に関する最も身近な窓口であり、地域ふれあい研究会活動のように、高齢者を知りたい学生と若者から刺激を受けたい高齢者のそれぞれの強みと弱みのマッチングもその活動の一つであると紹介された。

入院患者の生きがい支援としては、末期癌で帰宅希望のあった患者事例が紹介され、家族、保健師、介護・福祉サービスと連携しながら1時間でもいいから自宅に帰るための取り組みが紹介された。病院での看護経験が長いと、つい治療や安全を最優先したり、連携調整から躊躇したりしかねないが、こうした機会は患者だけでなく家族が自分の生き方を考える機会にもなる。武漢大学だけでなく、本学の看護学生にも聴かせたい講話内容だった。



7) 旭川市社会福祉協議会の取組みー独居高齢者支援の実際、取り組み例の紹介ー (社会福祉法人旭川市社会福祉協議会地域福祉課 旭 美樹生課長補佐)

前項前までのプログラムにも出ているが、全て行政サービスで賄うのは難しい。かつ生きがいはつながりであることは本研修会のテーマでも述べた通りである。この立場から、持てる力を発揮しつつ、あまり費用をかけないで、助け合いの中から介護予防

を図る旭川市の取り組みが紹介された。日本の国民性もあるのか『あまりガツガツ関わられるのは重い、けれどいざという時の安心は欲しい、低費用で…』の希望に、アメリカ型でも北欧型でもない社会支援とコミュニティづくりから独居高齢者を支える取り組みが紹介された。

このプログラムでは、武漢大学と高齢者の携帯電話の活用が少し話題になった。講話の中で、住民同士が見守り合う中で困りごとへ早期対応をしようという取り組みに対し、武漢大学からは、高齢者がかなり携帯電話を使い、困りごとのSOSを発信するシステムを活用しているという。日本では、携帯電話を使いこなす高齢者はそう多くなく難しいところもあるが、キャッシュレス化が進んだ中国では、携帯電話の必需性や高齢者の慣れ親しみは異なるのかもしれない。今後、より詳しく聞いてみたいと思った点だった。



8) 地域包括ケア病棟の開設経緯と運用開始後の実際 (独立行政法人国立病院機構旭川医療センター 地域医療連携室 佐々木亜万里副看護師長, 地域包括ケア病棟 渡邊麻美副看護師長)

前項までの病院以外の生きがい支援システムをご理解いただいた後、地域から患者として受けて、再び地域に帰る支援を行う、かつ看護職の主な現場である病院の立場からお話しいただいた。

旭川市は、医療機関が充実していることは恵まれている点だが、2040年に高齢者数がピークを迎え、以降減少に転じる上に在宅ケア推進となると、病床稼働率は低下することになる。超高齢社会では、急性期病院はそれほど必要ではなく、国も急性期病院を減らそうとしており、上川中部医療圏の急性期病院は1,100床多いと推計されている。

旭川医療センターでも、地域の病院として在宅復帰支援を目指し、病床稼働率の向上から2018年3月に地域包括ケア病棟開設に至ったとのことだった。開棟から間もなくではあったが、診療報酬の改

訂もあり、移行した方が診療報酬の上昇が認められたこと、看護師がより在宅支援を目的とした臨床看護が実践されるようになってきたことが報告された。

講話後は看護部の計らいで病棟での退院調整カンファレンスも拝見させていただいた。

武漢大学の教員も、医療の高度化が高齢者に十分な医療還元とならないこと、高齢者の疾患の特徴に合わせた病院整備、高齢化率と高齢者減から予測した計画的な病院再編成の構築に関心を示していた。併せて診療報酬転換のタイミングや判断も重要との考察だった。



3. 研修会の成果と今後の展望

1) 武漢大学より

研修会后、帰国した武漢大学孟宪梅講師より研修後記として「高齢化都市の一つである旭川市では、高齢者の日常生活から、安全、健康づくり、医療・

介護に至る系統的な保障の仕組みと高齢者に対する長期的な介護費用問題に対応するための制度が整備されていた。独居高齢者支援や看護師人員配置では、認知症高齢者のコミュニティ活用による支援や、病棟再編成（地域包括ケア病棟設立）による具体的な実践報告があった。日本の高齢者支援は、社会の様々な方向から持てる力を駆使し、コミュニティにおける互助や自助を動機づけ、健康寿命を延伸しており、我々はこれら一連を学ぶ価値がある。しかしながら、日本でも少子高齢化に伴う生産年齢人口の減少は、高齢者健康支援の担い手不足となっている。わが国の高齢化もまた深刻であり、日本の地域包括ケアシステムは高齢者の健康を支援する素晴らしい制度であり、コミュニティが持つ資源を開発し、近隣の相互支援を促進することは、高齢者の生活の質を高めるための効果的な戦略である」とお寄せいただいた。

研修テーマの中核にあった生きがい支援について十分伝えられたかどうかというところはあるが、地域包括ケアの重要性はご理解いただけたようだ。そして介護職不足の課題が旭川市と同様にある。

2) 今後の武漢大学との学術交流

(1) アメリカ型でも北欧型でもない社会保障の整備と検証

アメリカの看護をベースとしている武漢大学だが、経済的蓄えが整わないうちに急速な高齢社会を迎える中国において、アメリカ型か北欧型かの社会保障の選択は難しく、日本同様、中間型ないしは両型のどちらかよりの社会保障整備となると思われる。介護保険や年金制度が日本とよく似ているのもその表れと思われる。今回、介護保険開始20年後の課題より介護保険制度自体への関心が高かったのは意外であったが、思えば日本で介護保険が導入された時の看護学教育は今以上に臨床寄りであり、介護保険制度開始2年前は『1割負担？』『保険料は数千円/月？』の静観状態だったように思う。20年経って見えた課題を修正して中国が介護保険を運用した場合の違い、制度導入20年後の「生きがい支援」はどうとらえられるのかについて、検証できる可能性がある。

(2) ITリテラシーと高齢者支援

中国のITリテラシー(Information technology literacy)は急速に発達しており、それはまた高齢者にも及んでいることが伺えた。携帯電話の活用と同様に、どのように高齢者へのIT活用とシステム

への参加を支援するとよいか学べる可能性がある。

(3) 看護学生へのリアリティ教育

武漢大学は学内環境を整えるバーチャルシミュレーション、本学は学外の地域住民参加による実践教育が特徴である。日本では20年程前にモデルを用いたシミュレーションが普及したものの限界があり、模擬患者を活用した看護教育も研究されてきた。しかし、AI(Artificial intelligence)が発達する中でこれからのシミュレーション教育について今一度見直す必要があるかもしれない。この点において武漢大学と共に検証できる可能性がある。

3) 国際交流委員として

(1) やってみる、飛び込んでいく

これまで経験してきた国際交流は、大学間提携協定を結んでから事業を行うのが主流で、今回のように大学間連携協定とは別でありながら組織だった訪問団からの依頼で研修会を開催するのは初めての経験だったが、本学で中国の看護教員との交流の機会が得られたのは、貴重な体験だった。

未知なるものへの心的好奇心で英語の通訳に臨んだ筆者の野村(英語教員、専門はアメリカ文学)は、武漢大学看護教員の英語力に感心させられた。

武漢大学は中国が国の重要大学として力を入れている大学の一つである。その大学の教員にとっては、英語の一つや二つはできて当たり前という話なのだろう。教員も学生のために世界レベルの技術と見識を身につけるべく努力をしなければいけない。患者ケアのための良い循環ができていように思われる。

今回の5名も他国や他大学から学びたいという意思を持って旭川大学へやってきた。意思を持つ人達は逞しい。彼女らが中国の出身であることも、活力の要因になっているのかも知れない。彼女らには多民族国家にみられる明朗さと大陸出身者独特の大らかさがある(アメリカ人によく似ている)。無論、渡航先としての日本の魅力、とりわけ北海道への関心がそこにはあったのかも知れない。そうだとすれば、選ばれた者としてはとても嬉しい。

彼女らが今回の旅で何かを得たことを望む。5名の行動を業績主義と揶揄する者はいるだろう。揶揄する者たちに目を向けてほしい。彼らは自力で何かを生み出したことのない者たちだ。人生で大切なこと、それは何をやったかだ。何をやらな

かったではない。一方、彼女らの旅の成果はすぐには世の中には還元されないかも知れない。成果は十年後、いや百年後になるかも知れない。気障であることを知りつつ、私は学者なのでそんな時はこう述べるだろう。「それでもいい。未来の誰かのために何かをする。それがたったの一人の誰かのためだったとしてもだ」と。

今回の訪問の話の中川から初めて聞いた時、初日の通訳を本学経済学部の張興和教授が全て実施するとのことだった。私は同じ国際交流委員として迷うことなく張教授をお手伝いすることを中川に約束したのだが、いま振り返ると、私の意志は委員としての仕事というよりはむしろ、会ったことのない異国からのゲストに会ってみたいという単なる好奇心に起因しているような気がする。私は会ったことのない人に会ってみることを人生の仕事にしている。

旭川大学に勤めていることも幸いした。小さな大学だからできたこと、心を込めてできたことがあった。やりすぎてしまう場面もあった。しかしそれらすべては未知なるものへの好奇心がそうさせているだけなのだ。そもそも、5名が私たちを選んだところからすべてが始まり、私たちは自分たちの中の好奇心が動く方向に逆らわずに体を動かした。



好奇心は知的であることは大切だが、好奇心はまずは心的でなければならない。相手の心がどんな心なのかを知りたい。こう考えると、相手の心に飛び込むことができる。相手の心の中におもしろいと思える部分が発見できれば、相手とつながることができる。次に、相手といっしょに何かできないか、何か作れないかと考える。そこまでいけば、「する」「作る」を可能にするための方法を知りたいと思うようになり、方法を知るためには自然と教科書（知の資料）を開くようになる。大切なのは〈心→学問〉の順番。逆ではうまくいかない。逆だと、受験勉強になる。そう、教科書の丸暗記だ。

心的好奇心でもう一つ重要なもの、それは自分から相手に飛び込む気概。待っていては何も得られない。人生で獲得できるもののほとんどは自ら選択し、自ら行動して得られるものである。そこでは壁もテリトリーも無意味、壊す対象ぐらいにしか見えてこない。小さな旭川大学ではそんな心的好奇心を試すことができる。ここではみんながみんなを知っているのだから、お互い真心で接しなければならない。偶然なのだろうか、どの学科も社会の幸福を科学するものなので、私たち教職員と学生は「ケア」のことを地域の誰よりも強く意識している。今回の訪問に携わった旭大の面々（教職員が8名、地域ふれあい研究会の学生が3名）は中国からの訪問団をいつもの「旭大のまごころ」でお迎えた。

しかし最初に飛び込んできたのは彼女らの方だ。私は英語教師としての自分の役割を再確認した。英語の習得は海外で行動を起こすための手段でしかないということ、そして英語の習得に注目すればするほど、最初の一步は遅くなるということ。大切なのは学生に飛び込ませること。より大切なのはその前に自分が飛び込むことである。

(2) 海外来訪者に対する対応整備

今回の研修会準備を通して海外からの来訪者への対応を整備する必要性を感じた。国際化が進みグローバルな大学であるためにも気軽に国際交流が図られることは意義深い。具体的には予算、通訳、準備過程である。予算については国際交流員会へ予算枠の設定を申し入れた。また今回の通訳に留学生が入らなかったが、本学には中国からの留学生が在籍している。通訳を通して留学意義の再確認や学ぶ動機づけとして支援する必要がある。

また準備過程では、先方の渡航のための文書作成他、様々な手続きをシステム化する必要がある。

おわりに

本研修会でご講話いただいた皆様及び通訳でご援助いただいた高波澄子副学長、張興和教授、磯山こずえ様、国際交流委員会の深澤宗明委員長、岡田郁子委員、コミュニティ福祉情報をご提供いただいた大野剛志准教授、事務局の片平茂幸局長、千葉浩幸次長、林山あすみ庶務課長相当職各位に心より感謝申し上げます。

本論の一部は平成 30 年度第 4 回旭川大学地域研究所研究会（2018.11.6）にて発表した。

引用文献

- 1) 中川初恵, 大谷順子, 羽原美奈子, 出村由利子: 大学の強みを生かした看護と看護学教育に学ぶ 大学間教育研究活動連携研修会-倉敷・上海・旭川の看護と看護教育をつなぐ-より, 旭川大学保健福祉学部研究紀要, 9, 43-49, 2017.
- 2) 片山ゆき: 老いる中国, 介護保険制度はどれくらい普及したのか (2018)。- 15 のパイロット地域の導入状況は?, ニッセイ基礎研究所, <https://www.nli-research.co.jp/report/detail/id=59452&pno=4?site=nli,2018.8.27> (2018.12.25 閲覧).
- 3) 北海道新聞: 孤立死道内 110 人 初の全道集計 7 割高齢者, 北海道新聞電子版, <https://www.hokkaido-np.co.jp/article/177273,2018.4.3> (2018.5.1 閲覧).
- 4) Pinker, Susan. The secret to living longer may be your social life. TED Ideas worth spreading, https://www.ted.com/talks/susan_pinker_the_secret_to_living_longer_may_be_your_social_life?language=ja,2017.4 (2018.12.25 閲覧).